

## 標準眼科学 第10版

大野重昭, 木下 茂(編) 水流忠彦(編集協力)

本教科書は1981年に初版が出版された。私はこの年、ちょうど大学院を卒業した。臨床に戻る私にとって、最新の、しかも標準的な眼科学を改めてざっと復習するのに、本書は最適の教科書であった。

それから現在までの26年もの間に、この書は9回も改訂を重ねている。より新しい眼科学の知見を常に取り入れていく、という姿勢には脱帽である。特に今回の第10版は編者が「記念すべき第10版」と記しているように、かなり綿密な吟味のもと、改訂がなされている。

近年の診断機器の改良はめざましく、Heidelberg Retina Angiographによる網脈絡膜血管のより微細な観察が可能となり、OCT(optical coherence tomography)は網膜の10層構造を詳細に映し出し、いままで発見することが困難であった失明につながる網膜疾患の診断を飛躍的に向上させた。本書のなかでは、これらの診断機器の進歩に則した、より新しい画像、インパクトのある画像へと常に切り替えられてきている。

また、緑内障の項では年齢別有病率のグラフ、ぶどう膜炎の項ではBehçet病の発症地域の分布図を示す

など、より身近に疾患を感じながら勉強できるよう工夫されている。

今回新しく神経眼科の項も加えられた。神経眼科は、普通の眼科医でも取り組みにくい分野である。しかしながら、疾患としては増加傾向にあり、日常の診療でも専門的な知識を要求されることが多くなってきている。本書で神経眼科に少しでも親しみがわくことによって、さらに高度な内容を理解する取掛かりとなるであろう。

本書は医学生の教科書としてのみ用いられるにはもったいない書である。研修医はもちろん、専門医の試験前に「豊富なカラー写真から、その病因を考えさせる、考えてわかる書」として、十分読みごたえがありそうである。

九州大学教授・眼科学 石橋達朗

●B5 頁384 2007年

定価7,350円(本体7,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-00380-3] 医学書院刊